

突出した数字となっている。また、出生数も二十四年一五六四人、二十五年一二五九人と著しく多いことが分かる。いわゆる戦後団塊の世代(昭和二十二年から二十四年に生まれた世代)の誕生である。(以下次号)

【注】

(10) 『私たちの郷土』——大分県——(大分大学学芸学部社会科研究会 昭和二十五年)

(11) 豊田寛三・後藤宗俊・飯沼賢司・末広利人『大分県の歴史』(山川出版社 平成九年)

『表紙解説』

佐伯神楽の確かな起源は不明であるが、佐伯氏の祖である大神氏の祖先が、大和国から伝えられた三輪神楽の流れではないかといわれている。

江戸時代になって佐伯領内の各社家が伝えていた神楽は、面を着ない直面が主で、神職自ら演技するので神主神楽とも呼ばれている。神楽の奉納は神社の祭式中に織り込んで行われるもので、神殿を開扉しこれに向かつて厳かに舞う。したがって、芸能というより神遊びの神事

に近いものである。

神楽の名称は御神楽・四季の神楽などと呼ばれていたが、近世になって佐伯地方に伝わっているのは佐伯神楽といわれている。扇・鈴・御幣など採り物だけで舞うので、採り物神楽に分類される。神楽の演目は、神開・入座・魔祓・玉串・御弓・織居・長刀・神遊・御劔・御華・御網・庭燎の十二番である。舞い方には平楽・本手・奥手がある。

佐伯地方では各村々の神社で季節ごとに奉納するが、神楽の花形はなんといっても御綱舞い(綱切り)であろう。この御綱は晒し木綿で氏子衆の中に病人のいる家や、厄年などの人がこの木綿を奉納する。これを神楽殿の四方角から中で交差するように張り、神舞いの最高潮に達した時切り放す。これで病氣や災厄を断ち切り、めでたしめでたしである。

解説 五十川 千代見

写真提供 成 迫 義 男

(佐伯市木立西の平)